

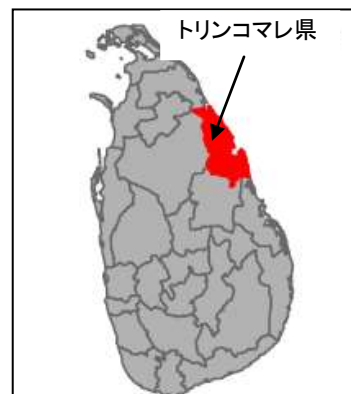
東部州トリンコマレ県復興支援

—セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの活動—

2011年8月

在スリランカ日本国大使館

2009年5月、スリランカで26年間続いた国内紛争が終結しました。東部州トリンコマレ県は2006年まで約10年間にわたり反政府武装組織に支配され、紛争の影響を大きく受けた地域です。長年の激戦により、生活基盤となるインフラの多くは荒廃し、10万人以上が家屋や家畜、生計手段を失いました。2006年以降、多くの人々が避難民キャンプや他県の避難先からトリンコマレ県に帰還し再定住を始めましたが、生活の再建は決して容易ではありません。



セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは、2008年ジャパン・プラットフォーム助成事業による「トリンコマレ帰還民緊急教育支援」の実施を経て、2009年より、日本政府が実施する「日本NGO連携無償資金協力プログラム」の資金援助を受け、トリンコマレ県内の35村における幼児教室の建設と修復、子どもたちへの栄養補助食提供、幼児教室運営委員会や教員の養成等の活動を通し、住民の再定住支援を行なっています。

子どもたちに明るい未来を



破壊された幼児教室を呆然と見つめる児童

その村の一つ、ムトゥール郡チョナイヨル村は、トリンコマレ市内から約60km南に位置する人口1,025人の村です。紛争時の攻撃により、多くの建物が破壊され、人々は家を失いました。また、帰還してもこの村には仕事がなく、多くの人々が現在も1日300～500ルピー（約240～400円）の日雇い道路工事などで生計を立てています。

しかし、どんなに生活が貧しくても、人々の一番の心配事は「子どもの教育」です。この村への帰還者には36名の幼児も含まれますが、この子どもたちが通うはずの幼児教室も破壊され、閉鎖されてしまいました。「貧しくても、子どもたちには大きな町に負けないくらいの良い教育を受けさせたい」そう強く願う教師、保護者、その他住民たちが一丸となり、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンと一緒に活動を始めました。

まずは、子どもたちが幼児教室に通うための洋服、文房具、スクールバックが用意されました。次は、園舎が建設されるまで開かれる野外教室の設置です。初めは、まだ園舎のない幼児教室に子どもを通わせることに抵抗を感じる保護者もいましたが、徐々にこの活動の重要さが理解されるようになり、子どもの数も増えていきました。自宅で十分な栄養が摂れない子どもたちが多いため、栄養補助食の配給も始まりました。



野外教室の実施



幼児教室で栄養補助食を食べる子どもたち

「幼児教室は本当に楽しい！」生徒の一人であるスダシニちゃんは、元気いっぱいの声で幼児教室に通う喜びを表しています。スダシニちゃんの家族は、戦闘から逃れるため2007年にこの村を離れ、その後2年間避難民キャンプで過ごしました。そのためスダシニちゃんにとって、今回が初めての幼児教室での生活です。今ではたくさんの新しいお友達もできて、毎日楽しく通っています。現在は、教室も野外教室から完成した建物に移りました。「今日はね、ダンスを習ったんだよ！みんなで上手に踊れたよ。あとね、お絵かきもしたよ！」と、その日幼児教室で学んだことを、とても誇らしげに話してくれました。紛争の影響によって子どもたちが受けた心の傷も、幼児教室でみんなと楽しく過ごすことで、少しずつ治癒されていきます。



新しく建設された幼児教室。元気な子どもたちの笑い声が絶えません。

子どもたちの笑顔に支えられて

生徒の保護者たちは皆、子どもたちが幼児教室に通う姿を嬉しそうに見つめています。貧しい生活の中では、つい気持ちが塞ぎ込んでしまいがちですが、子どもたちの元気で明るい姿は大人たちに大きな励みと活力を与えています。スダシニちゃんのお母さんも、「笑顔で帰ってくる子どもの姿を見ると、私も頑張ろうと元気が出てくるわ。」と言って笑顔を見せてくれました。

また、住民や保護者たちで構成される幼児教室運営委員会や教員の養成活動を実施することで、ますます幼児教室や村全体に活気が生まれてきました。幼児教室の掃除や保護者会に積極的に参加する保護者も増え、住民間のコミュニケーションの機会も増えました。今では、様々な幼児教室の活動を通して、地域住民の結束も広がりつつあります。

子どもたちが幼児教室に通うようになり、村全体の生計向上にも効果が見られるようになりました。これまで子育てに追われていた大人たちが、家事や農業、職探しをする時間の余裕が持てるようになったのです。セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの活動をきっかけに、チョナイヨル村は復興の大きな一歩を踏み出しました。